美紗の会 たより

夢か現か現が夢か

西松　布咏

コロナ禍による「夢か現の春の憂い」は全国の桜が闇に隠れてしまった四月二十五日を過ぎても続き「第五十九回美紗の会のつどい」は六月六日に延期したものの拡大は収まらず、いつもお借りする赤坂クラブを七月十一日に再延期した。

その間、自宅の稽古場を閉鎖しても何とかリモート稽古を続け、次の会に向けての不安を抱えながらも会員一同気持ちが途切れることはなかった。しかしながら危惧した通りzoomでは繊細な稽古は出来ず、寂しさが疲れとともに襲いお互いの姿が見えても場を共有出来ぬフラストレーションばかりが残った。

とは言え不要不急の外出自粛での中、居ながらにして稽古を継続できたのはリモートのお陰と文明社会の有難さも実感した。

今まで当たり前のように過ごして来た日常生活を変えざるを得ない閉塞感はあったが、日頃得ることができない時間が出来、疎遠になっていた人との関係や曲に対しての想いを深めるきっかけが出来たことは思わぬ収穫であった。

ひと月ぶりに稽古場を再開した時「やはりこうして稽古ができるのが一番ですよね！」と元気な笑顔での再会の一瞬を忘れることが出来ない。zoomでは伝達することは出来ても互いに生成することが出来ないもどかしさ。同じ場所を共有し空気を震わせ音を紡いでゆくことが本来の稽古であると言う日頃の私の理念も、お互いに学び合えた貴重な体験であったと思う。

コロナ禍でもこのように稽古を続けてきた成果を何としてでも発表させたい！と師としての私の想いは日毎に募ってゆく。しかし、実はその場が未だに決まっていなかった。何度か赤坂クラブの女将と交渉を重ねるうちに難しい実情になっていたのだ。究極の事態なのだから中止になっても言い訳が立つと幾たびも思った。でも気がつくとどこか可能な場所が無いかとそればかりが頭をよぎる。そして時は刻々と過ぎてゆく。

「そうだ！この想いを多身予さんに相談してみよう」三月十四日人形町・よし梅での『春の憂いに花添えて』を実施した時の女将とのやり取りを思い出した。「それで駄目だったら諦めよう」と覚悟を決め電話をした。私の必死の思いが通じたのか・・・色々な制約や人数制限を確認の末、遂に七月十一日「よし梅・芳町亭」での『美紗の会のつどい』を開催することが出来る運びとなった。

「人形町・よし梅」は四年前の秋、招いて下さった方と玄関口に草履を踏み入れた途端、磨きこまれた懐かしい木の温もりに包まれ身が震えた。このお座敷で三味線を弾いてみたい！と一目惚れしてしまったのだ。斯くして縁の糸が結ばれ、季節の変わり目に演奏させていただいている。

ようやくこのお座敷でコロナ禍にあっても稽古をしてきた一門の会が出来る！夢のようで跳び上がらんばかりの嬉しさであった。

しかし現実は日を追ってコロナが拡散し家族や職場から反対され已む無く参加を断念する人数が増え、曲目や相方の組み合わせ変更の為プログラムを刷り直したりとその日を迎えるまで心の休まることはなかった。

当日は日頃のお客様勧誘をせずに、ごく親しい方のみに抑え、舞台の前にビニールシートを設置し唄う時を除いてはマスク着用の物々しい幕開けとなった。

しかしながら稲垣文子さんの柔らかな笑みと共に司会が始まるといつもの和気藹々の雰囲気のなか粛々と会が進んでいった。

ここでの催しの会は、歴史を刻んできた佇まいの空気に包まれ、いつも心地良く穏やかな気持ちで演奏できる幸せを思うのだが、弟子の一人ひとりが何とも伸びやかに嬉しそうに演奏している。その様を控えの間で聞いていながら、随分と心労の末の会ではあったが実施出来て良かった！と心底思った。

然し乍らこの会では世話人の加藤さん、よし梅の女将、佳咏会長、そして私の想いに応えてくれたお弟子さん方の親身のお陰があったからこそ。ともすると想いが先行して周りを巻き込んでしまう私の今

後の自戒にもなった会であった。

この「美紗の会たより」を毎回楽しみに待って下さる方々のお一人、編集工学所長の「松岡正剛」氏から会の前に達筆の葉書をいただいた。「コロナで大変ですね。けれどもこういう時だからこそ地唄であり三味線です。」この一節がどんなに心に響き励まされたことだろう。

コロナ自粛以前から時間を作っては今まで培ってきた小唄。端唄。歌沢。富本。の録音をしてきた。しかしいつ収束するか想像すら出来ない現状に憂いてばかりはいられない。今こそ、西松文一師から一子相伝のように伝達された曲をもう一度掘り返し、譜面を作成し録音して残してゆかねばと思うに至った。

十年余り毎週通っていたフィットネスをコロナ禍で辞め、近所の早朝散歩をこのところ続けているが、つい最近新聞掲載の『東京どんぶらこ・三田の寺町』に誘われその界隈を歩いてみた。その昔三田高輪あたりは、海がそばにあり四十以上の寺が集まり都内屈指の寺町だった・・・と今更ながら生誕の地の歴史をたどっていると、三味線の始祖である石村近江の墓と碑のある大信寺に行き当たった。私が三味線と出逢い、その生涯をどのように終えたいかを密かに念じたこの時。まさに夢のような出会いである。

世界中が目に見えないコロナと戦っているこの現。夢か現か現が夢か・・・盲目の師が残して下さった魂と音源を探りながらの果ない心の旅をゆっくりと続けてゆきたいと思う。

いちばん綺麗な櫻

川崎　隆章

「師匠、今年はとうとう桜を見ませんでしたね」

四月に発表するはずだった「夜櫻」の稽古を終えて、思わず口を吐いて出た一言だった。

「花は咲いてるんですけどね。今年の桜は空想の桜になりました」

「見なかった桜が、一番綺麗なのかもしれないわよ」

窓から差しこまれる夏の白さを帯びたような光を背に、まるでシルエットのようになった布咏師匠がそう言った。六月も半ばを過ぎ、すでに稽古場は夏のしつらえになっていた。

「見なかった桜」とは何だろう。そういえば、たまたま聞いた青森放送のラジオで「弘前城の桜が満開だというのに誰も見でやれねぇなんて、なんだが、かわいそうですねぇ」とため息交じりに喋っていたのを聞いたが、楽しみに花を咲かせた桜にとってこの春は拍子抜けだったかもしれない。いや、もちろん桜が自然の摂理に従っているのは知っているが。

コロナ蔓延下の行動制限。これが江戸時代だったら、吉原大門で人は止められたのだろうか。そうなれば客が来なければ花も咲かせようがないわけで、夕暮れに清掻きも響かず、さぞ張り合いがなかっただろう。いや、それはあくまで男の側の妄想で、その実、そろって日ながゴロゴロと仲良く粉茶を挽いていたのかもしれない。日々挽いた茶が山のようになって「もういいよ」となると、もうやることがない。客が来ないのに飯代だけ差っ引かれるから、いつも心もとない。手持ち無沙汰で三味線を引き寄せて、唄うような唄わないような。いずれにしても、男から見ればそれぞれ風情のある絵にはなるが、やっぱりそれも妄想の桜。

ありがたいことに人間は妄想に遊ぶという能力を与えられている。人間以外にも妄想にふけることができる生き物がいるようだが、現実との境目を曖昧にしてこの世の苦しみを紛らわせる調味料にまで仕上げている生物はいないようで、そのおかげで、爾来、人間の営みには「文化」と呼ばれるオマケがくっついてくるようになった。

文明は「火」から始まったという人がいる。「石」から始まったという人もいる。「言葉」の誕生を文明と考える人もいる。まぁ、誰も、それぞれの最初の瞬間なんか見てはいないのだから大したことはないのだが、すくなくとも「文明」より「文化」の方が後から生まれたというのは間違いないわけで、つまり、食べものにわざわざ火を通し、必要以上の明るさの炎を掲げ、実用以上の装飾を施した矢尻を作ったり、不要不急の会話を面白くしようと言葉を選び始めた時から、文明は文化を引き連れるようになっ

たのだ。

コロナウイルスの拡大防止のために、何より犠牲になったのは、まさに不要不急の何かをエサに生きてきた、足手まといなパートナーである「文化」だった。まず、文化においては、不要不急なものほど価値が尊ばれる。文化財なんて、失われても、誰の生活の支障にならないものばかりではないか。でも、百年後、千年後、いや、早ければ十年後に突然眼前の光が失われたかのように絶望に陥ってしまうのが、そうした不要不急のカタマリであり、そんな時のために、戦乱の世であろうとも、幕府が政府と名を変えようとも、戦災で国がボロボロになろうとも必死に守り続けてきた「究極の不要不急」こそが、伝統文化というものなのだ。

七月十一日土曜日。日本橋のよし梅・芳町亭で第五十九回「美紗の会」が開かれた。思えば大変贅沢な趣向で、この手筈を整えてくださった皆様方には本当に感謝申し上げるばかりだが、これなども、まさに日本文化の不要不急の代表格である唄と料亭が、この緊急事態に身を寄せ合った大成果ではないか。さらに、そのおかげで我々は、愛でられなかった花を愛で、見られなかった花火を心に浮かべることができた。出会うことが叶わなかった旅や景色や、触れることができなかった色や光にも再開できた。こうして辛うじて秋までは「文化」を繋ぐことができた。

もともと、想いでや離れた先の「見えざる情景」を言葉と節に託すのは、お座敷唄の本領と言えるのだが、今回はまさに、そこを問い直されたように思う。実物の桜を見たから、櫻の心が唄えると思ってはいないか。

桜を見なかったことそのものが本当に寂しいのか。そもそも「桜なんて毎年見られるから」と思ったことはないだろうか、と。

また、逆に「私は本当に桜を見ていたのだろうか」とも思う。

毎年見ていた桜には、まだまだ見えていなかった部分があったに違いない。

あの一弁の花びらにも、隈取のような鮮烈な色使い、湖水のような静寂な平面、名刀のような反りが隠されている。それを本当にこの目に焼き付けていたか。

奪われたがゆえに知る悲しさ。さあ、その悲しみを唄にどう反映するか。

唄いたくても歌えなかった時代。唄いたくても声が出せなかった時代。

本来あるべき自由が奪われた切実をどうとらえているか。

いつか思い出となる時は来るのだが、今はまだ「まっただなか」にいる。

今、何を見つめるか。

今、どこに耳を傾けるべきか。

今、何に触れるか。

それは、こんな時に命がけで江戸唄をやっているのだから、歴代の道楽者に名を連ねるつもりで、まっすぐに「見えない風光、見えない明媚」を丹念に唄ってゆきたいと思う。

今年の「見なかった桜」が、これからも綺麗に咲き続けますように。

感謝のご挨拶

己紗壽咏こと 花柳 千壽文

二月頃より新型コロナ感染拡大により自粛生活を強いられ、生活が一変してしまいました。体力低下を感じるようになり、稽古日の地下鉄による往復も感染や階段での転倒などを考えると自信が持てず、継続は無理と悩んだ末、先生に心の内を申し上げました。

九十歳まで続きましたのも居心地の良い美紗の会のお陰でございます。

九十年を振り返ると、世界恐慌、激動の始まりだった昭和四年の秋、南青山に生まれた私は、両親の愛情を一身に受け、六歳六月六日から日本舞踊を習い始め六歳で田村町飛行会館にて長唄手習子、七歳で軍人会館(九段会館)の舞台で本衣装付けで常磐津「角兵衛獅子」の女太夫役で花道から出た途端、会場のどよめきと笑い声にびっくり、台詞で笑われ子供心に胸にグサッ、恥ずかしくて恥ずかしくて。今思えば可愛いいお子が大人の形で踊るので一挙手一動に

歓声が湧いたと理解出来ますが…。

やがて世の中はいよいよ戦前・戦中・戦後の厳しい時代に突入していきます。学徒動員で工場へ通学ならぬ通勤、日々のB29の空襲爆撃、艦載機P51の低空での目前に迫る機銃掃射から身を守るのに必死で、無事帰宅する娘を両親はどんなにか心配して待っていてくれただろうかと思うと七十数年前のことでも胸が熱くなってまいります。

終戦後の昭和二十二年三月焼け野原から復興に向けて町に活気が戻りつつある中、宗家二世花柳壽助稽古場にて名取試験に臨み、、師範に合格し花柳千壽文を拝受いたしました。プロの道を選び四六時中「己の芸に満足したらそこでその人の芸は止まる」の言葉を胸に来る日も来る日も精進した頃がつい昨日の様に懐かしく思いだされます。

昭和二十七年結婚を機に舞踊活動を一時中断し、ひたすら家庭と子育てに一心不乱に二十年が経過しました。気持ちに余裕が出来、家族の協力もあり、壽楽師に復帰を願い出、舞踊界にカムバック。師は背中を押して下さりブランクを取り戻さなければと必死で精進いたしました。

平成三年の秋、そろそろ三味線を楽しもうと箱から取り出したところ皮が破れていたので町内の「菊音三絃店」に出したのがご縁で「美紗の会」に入門。当時先生は「橋場はつえ」の名でご活躍。創作に意欲を燃やしてらしてお若く、お美しく、美声のお稽古に魅せられ、次のお稽古が待ち遠しくて楽しく通ったものです。翌年二月の御弾き初めは国学院院友会館で未熟ながら「有明」を唄い「惚れて通う」「青柳の」を糸で初舞台を務めさせていただきました。

小唄、端唄は勿論　私の踊りも美紗の会で育てていただいた様に思います。布咏師主催の「虹の会」の舞台での経験や泉鏡花の「歌行灯」、森鴎外の「雁」では布咏師の作曲に振り付け、稽古に集中し私なりに試行錯誤積み重ねながら力の限り演じ燃焼したその時、不思議な目に見えないものに遭遇し舞台に神が宿り、私が最も尊敬しお慕いする壽楽師が顕われ舞い納められた感触に思わず拝んでいた私がおりました。これも布咏師のお陰と言葉に尽せぬ恩恵に心より感謝申し上げます。

美紗の会のお仲間の皆さまには何かにつけ親切にして頂きお世話になり、ご後援、ご声援を頂きそのご恩は生涯忘れることはございません。

末筆ながら紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。これからも美紗の会のご活躍とご発展をお祈りいたしております。

本当に、ほんとに有難うございました。

《今後の予定》

◎十月三十日(金)
閑埼扇ひで 第二回リサイタル
紀尾井小ホール　十九時開演
扇の会・あさきゆめみじ
舞　閑埼 扇ひで
唄と三絃　西松 布咏
尺八　善養寺 恵介
演目　鐘が岬
尺八古典本曲「越後三谷」
江戸みやげ
葵の上

◎十一月二十九日(日)
第六十回 美紗の会のつどい
記念演奏会
神田明神文化交流館四階 令和の間
十三時開演
己紗の聲・美紗の会一門の会

■たより 第92号
発行者　美紗の会
編集責任者　照沼 太佳子
デザイン　近藤 幹則

■美紗の会
主宰　西松 布咏
稽古場　港区白金台三-二-二
白金台プレイス三階
電話　(三四四一) 一七二六
(五四四七) 一四一二
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www.misanokai.com/